魔法少女リリカルなのは　［違う道での歩み］

セラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　［違う道での歩み］

【Ｎコード】
Ｎ１１２９ＢＡ

【作者名】
セラ

【あらすじ】
破壊の限りを尽くし、最後は自身の命を絶った主人公。だが、目を開けるとそこには一人の男性が立っていた。男性は自分を『神』と名乗り、主人公に人生のやり直しを命じる。過去に飛ばされた主人公は、そこで将来管理局で最も有名になる少女達と出会う。この出会いが未来を変えるのだろうか…主人公はまた破壊の限りを尽くすのだろうか…なぜ神は人生のやり直しを命じたのだろうか…※ほぼ原作通りにしたいと思いますが、途中オリジナルやハーレム要素などが出てくると思います。お読みの方はこれらのことを踏まえて

お読みになってください。

古き道

新暦００８０年――――世界は崩壊した

たった一人の者によって…

嘗(かつ)てミッドチルダと呼ばれ、栄えていた場所はもう人の気配はなく、辺りには瓦礫の山ができており、そこに建物があったとは思えないほどになっていた。

そんな場所に佇(たたず)み、空を見上げている者がいた。

「…つまらないな」

言い終わると、視線を空から瓦礫の山しかない街へと移した。

「…この世界には壊すものがもうないし、目的である管理局員も全員殺した。やるべきことはもうない…か」

「…本当につまらないな」

そう言うと、また視線を空へと移した。

しばらく空を見ていると、その者は何かを考え付いたようだった。

それは…

「そうか…やることも目的もなければ、死ねば良いのか」

自分自身の死であった。

「こんなつまらない時間が何十年も続くぐらいなら死んだほうがマシってもんだな」

そういうと、自らの頭上に手を翳(かざ)し、何かの言葉を発した。

「あぁ～あ…つまんねえ人生だったな」

そう言い終えると、辺りが白い光に覆われ
光が収まると、そこには誰も居らず、消えて…いや消滅していた。

古き道（後書き）

どうもセラです。

これが初投稿になるので至らぬ点もございますが、御了承ください。

意見や感想、お待ちしております。

新しき道　【前編】（前書き）

ここからは主人公目線での話になります。

新しき道　【前編】

生きている意味を無くした俺は自分に魔法を撃ち、それで終わりだと思っていた。
だが、それで終わりではなかったらしい。

「…どういうことだ？俺は確かに死んだはずだ…なのになぜ…」

俺は困惑していた。
当然だ、目を開けるとそこは、周りに何もなくただ白い空間でなぜか俺だけが立っていたのだから。
最初は死後の世界という非現実的なことも考えたが、肉体や五感があることからその考えを捨てた。

「何なんだよ…ここは」

「ここはオレが創りだした空間さ」

「！？」

俺が悪態をついていたら、背後からいきなり声が聞こえてきた。
俺は背後を取られたことに驚きながらも声の主のほうを見た。そこに居たのは…

「俺っ…だと！？」

確かに俺だった。だが少し俺とは違っていた。俺は黒髪黒眼だが、そいつは金髪に金色の眼をしていた。

「おいおい！そんなに警戒しないでくれないか？オレは別に君の敵じゃないんだから」

そう言ってそいつは両手を上に出しながら俺に近づいてきた。

「…どうやら言葉は通じるようだな。じゃあ俺の敵じゃないんだったらお前は何者だ」

俺は警戒を解くことなく得体の知れないそいつに聞いた。
そいつは歩みを止め、俺を見据えてからとんでもないことを言いやがった。

「オレは…神さ」

「…ふざ「ふざけてなんかいないよ。これはゆるぎない事実さ」」

そいつは俺の心を呼んでいるかのごとく、聞きたいことを次から次へと言っていった。

「君は確かに死んだよ。でもオレが一時的に生き返らせたのさ。君にやってほしいことがあるからね」

「この姿のことだけど、これは君の身体を投影してるからさ。元々オレたち神には肉体が無くてね。まあ無くても話すことはできるけど、あったほうが君としては話しやすいだろ」

「ここはさっきも言ったけどオレが創りだした空間。何者にも干渉されることはない」

…出鱈目すぎる。そう思うことしかできなかったが、一つ理解した

ことがある。それは、こいつを殺せばこんな意味のわからない世界から解放されるということだった。

「…そうか。聞きたいことは大体聞けた。お前が言ったやってほしいことが何なのか知らねえが…」

俺はそいつに手を翳(かざ)し、そいつを殺そうと魔法を撃とうとした。だが…

「っ！？（魔法が…出せない！！）」

「あははは！君ならそうすると思ってここに連れてきた際に、君の魔力を無くしておいたんだよ。ちなみにオレを殴り殺そうとしても無駄だよ。今さっき、そこから動けないようにしたからね」

「ちっ！！」

確かに奴の言う通り、魔力は全然感じないしこの場から動くこともできなかった。どうすることもできない。完全に俺の負けだった。

「…それで、俺にやってほしいことってのは何なんだ」

「おっ！やっと話を聞いてくれる気になったかい？なに、話は簡単さ。君には転生をしてもらいたいのさ」

「転生…だと」

その言葉に俺は耳を疑った。

新しき道　【後編】（前書き）

前回の続きになります

新しき道　【後編】

「そう。転生だよ」

「…お前、俺が今まで何をしてきたか、神なら知らないはずないだろ」

「もちろん知っているさ。知ってて言ってるんだよ」

そいつは一瞬笑みを浮かべると俺の周りを歩きだした。

「君は新暦００８０年にて世界を滅亡へと導いた、恐るべき力の持ち主。その力は産まれながらにして持っていて、あらゆるものを消滅させるという魔法界においては最悪の魔法だった…」

「本来なら捕獲された瞬間に殺されるだろうね・・・だけど、ある機関は殺すのではなく研究することにした」

「その研究目的は軍事力の強化。君のその力を兵器として利用できるなら、軍事力は数十倍にも跳ね上がるからね。そのため、君はその研究所で秘密裏に十年間幽閉されていた」

「そしてその機関が…数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関。通称『管理局』」

やつは俺の前まで来ると歩みを止めて、俺の顔を見ながら笑みを浮かべた。

「そして君は世界への復讐を始まる。研究所の破壊、管理局員の惨

殺に街の破壊。“人という命を消し、栄えに栄えた街を廃墟とした”」

「…うん！誰がどう見ても悪人としか思えないほどのものだよ」

「…理解できねえな。そこまで解っていながら、どうして転生の対象が俺になる」

俺にはこの神が何を考えているのか見当すらつかなかった。普通そうだろ？「あなたは世界を滅ぼしました。なので転生させます」なんてどんなバカだろうとしない。地獄やら奈落に落として「はい、さよなら」これが普通ってもんだろ？

そんなことをしないこいつを俺は本当に神なのかと疑いはじめた。

「確かに、本来なら君みたいな人間を転生なんてさせないんだけど、これには理由があってね」

「理由だと…」

「そう。君たち人間にはわからないだろうけど、世界にはいくつもの『道』がある。その道にはいろいろな可能性があってね」

「例えば、文明がそれほど発達していない世界、魔法がない世界とかだね。君たちの言葉では“並行世界（パラレルワールド）”と言われているね」

神が言うにはこの並行世界で時々、異例の改変が起こり、道が閉ざされることがあるらしい。その改変を取り除き、元に戻すのがこいつら神の仕事だという。

「だけど、今回の改変はオレたちでは対処できないほどになってしまってね…そこで！その世界に住む有力な者の力を借りようということになったのさ」

…なぜ俺が転生の対象に選ばれたのか、俺には容易に理解することができた。

「…なるほど。その改変ってのは普通の有力であれば問題は解決されるかもしれないが、命の保証はどこにもない…」

俺は不敵に微笑み、やつの思惑であろう言葉を言った。

「だが…罪人である俺ならば死んでもかまわないって訳だ」

「さすが…裏の思考を見抜くのは慣れているね。なら話は早い。オレたちに力を貸してくれないか」

「へっ！頼みになってねえよ。それに俺が転生したところでまた世界が消えるだけだぜ…」

俺は挑発とも思える笑みを見せた。だが、それでも返ってきた言葉は予想をはずすものだった。

「…かまわない」

「あぁん？…」

「かまわないと言ったのさ。転生すればそれはもう君の世界（道）だ。オレたちが手を下すことはない」

「…神様の言うセリフじゃねえな」

ほんとに神かよこいつ…

「勘違いをしてもらっては困るな。神は最初の道“人の産まれてくる場所”は選択できるが、その後の道など選択することができないのさ」

「オレたちは切っ掛けを与えてるに過ぎない。そこからどう生きるかはその者しだいだ。だから君が世界を壊そうが何をしようかまわないさ」

「…ふふふ、あっはははは！！」

「なにがそんなに可笑しいんだい」

「なに、やっぱり神とは思えなくてな！だが…やってやるよ、その転生！」

おもしれえ。このまま地獄に行くよりは転生したほうが面白そうだ。こいつの言うことは信用できねえがそんなの関係ねえ！

俺は俺のやりたいようにやるだけだ！改変だろうと何だろうと俺はただ消すのみだ！

「ではこれより転生を行なう。詳しい内容はあちらの世界で話すとしよう」

神は満足そうに言うと俺の身体がどんどん粒子となっていき、最後

には何も残らず、その場には神だけが居た。

「一度は消した世界で君は“何を見て”“何を感じるのか”…楽しませてもらうよ。消滅魔導士（デリートスレイヤー）」――――――

新しき道　【後編】（後書き）

やっと神との会話を終えることができました！

ちょっと長文なので間違っているところやおかしな点があると思います。そのときはご指示ください。

次回は少女との出会いについて書きたいと思います。

こんな駄文をお気に入り登録して下さった方、本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1129ba/

魔法少女リリカルなのは　［違う道での歩み］

2012年1月5日00時49分発行